

鎌田東二の

# 霊性の京都学

8

京都の生態智を求めて

## 平安京とバリの生態智

### 一 「平安京生態智」の四大要素

最澄と空海が平安京の霊的防衛に新たな哲学と仕掛けを施したことを先回に指摘した。最澄は「道心」を持つ「国宝」を育て上げることに意を尽くし、そこから二二年間の籠山行や回峰行などの修行が生まれ、それは新たな仏道修行の体系と宗教意識の地平を切り拓いた。空海は「十住心」のグラデーションを提示し、その「心」の階梯を駆け上る「即身成仏」の道を示し、仏と神の相補関係を基礎づけた。この二人の平安新仏教の開創は、極めて斬新で、かつ後世への決定的な影響力を及ぼす新基軸の創造であった。

その独創の根幹をわたりは「森林仏教の開創」として捉え、そしてそれを「平安京生態智」の基軸の一つと考えている。「生態智」とは、ギリシャ語では *ecosophia*、英語で *ecological wisdom* であるが、その概念を「自然への畏怖・畏敬の念に基づき、自然と人工との持続可能な創造的パラ

平安京の生態智とバリ島の生態智。同じ「島国」という共通点からその生態智を比べてみると、さまざまなか見えてくる。

「生態智研究」を明示すれば図々 のようになる。

さて、「このような「生態智」の具体的集積として神社の祭礼を事例として取り上げることができる。特に、賀茂神社の「葵祭（賀茂祭）」の中にその具体例を見出すことができる。葵桂の使用と双葉葵の象徴の意味づけ、御阿礼神事、競馬など、そこで用いられる植物や動物やさまざまな技芸のワザを「生態智」の個別具体的表現として見ることで

「生態智研究」を明示すれば図々 のようになる。

さて、「このような「生態智」の具体的集積として神社の祭礼を事例として取り上げることができる。特に、賀茂神社の「葵祭（賀茂祭）」の中にその具体例を見出すことができる。葵桂の使用と双葉葵の象徴の意味づけ、御阿礼神事、競馬など、そこで用いられる植物や動物やさまざまな技芸のワザを「生態智」の個別具体的表現として見ることで

本店 ☎ 075-221-5810  
 岡崎店 ☎ 075-751-7880  
 金閣寺店 ☎ 075-463-1039

京都  
**燈太呂**

Kyoto GONTARO

定休日 水曜 営業時間 11:00 ~ 21:30( L.O. ) 22:00閉店  
<http://gontaro.co.jp/>

夷川  
 豆政

創業明治十七年  
 京の豆菓子老舗

604-0965 京都市中京区夷川通柳馬場西入6-264  
 TEL.075-211-5211 <http://www.mamemasa.co.jp>

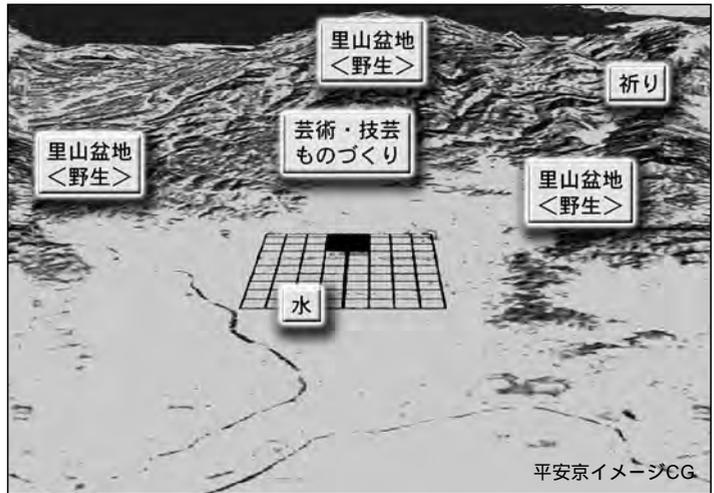


鎌田 東二 かまた とうじ

1951年、徳島県生まれ。國學院大學文学部哲学科卒業。同大学院文学研究科博士課程神道学専攻修了。京都大学こころの未来研究センター教授。宗教哲学・民俗学。文学博士。神道ソングライター。著書に『神と仏の精神史』春秋社、『神道のスピリチュアリティ』作品社、『聖地感覚』『神と仏の出逢う国』角川学芸出版他。  
<http://homepage2.nifty.com/moon21/>

図 平安京生態智 (Ecological Wisdom・Ecosophia)

自然への畏怖・畏敬の念に基づく自然と人工との持続可能な創造的パランス維持技術・思想・システム～水、祈り、芸術・技芸・ものづくり 里山盆地 野生 (CG制作：大西宏志)



平安京イメージCG

きよう。双葉葵の使用とともに、鈴を掛けた馬を猪頭いのちをかむった騎手が疾走させて、賀茂別雷神大神の崇りを鎮めたのが賀茂祭の始まりだと伝える『賀茂縁起』も実に興味深い。なぜ猪頭をかぶって馬を疾走させたのか。それが崇りを鎮めることになるという感覚と論理はいったい何であるのか。それがどのような「生態智」と言えるのかが掘り下げられねばならない。

ともあれ、最澄と空海は比叡山と高野山という森林の中に拠点を築き、高野明神像が黒犬を連れた獺師姿で描かれているように山民文化や山の金属技術者ネットワークに支えられていたことは間違いない。「森林」こそが「身心」を鍛え、練り上げてゆく格好の場所となった。そしてそのような比叡山と高野山の開創による「森林仏教」の発展が「草木国土悉皆成仏」とか「天台本覚思想」として結実していく。それは「自然」がそのまま仏であり神であり、自分自身の本姿であり、そのまま成仏していると観る感覚と思想である。このような感覚と思想は「森林仏教」の発展の中で深化し熟成していき、やがてそれが山王曼荼羅や熊野那智参詣曼荼羅などの、山や海を御神体と讃仰する日本独自の曼荼羅図像表現を生み出した。

二 バリ島と平安京の「生態智」

さて、「生態智」という概念をより鮮明にかつイメージ豊かにするために、比較宗教学的な観点からバリ島やアイルランドの宗教文化と「生態智」との関係を探ってみたい。というのも、つい先ごろ、三月一日から一五日までバリ島に行つて、新年を迎えるための民間儀礼を見学した。バリ島には五回ほど訪れているが、そのたびに、日本の古層伝統文化との共通性を感じとってきた。そして、「平安京生

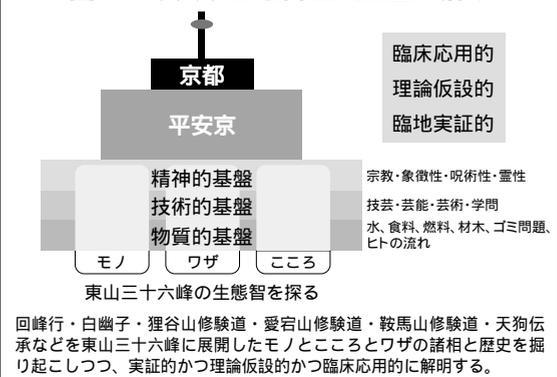
きよう。双葉葵の使用とともに、鈴を掛けた馬を猪頭をかむった騎手が疾走させて、賀茂別雷神大神の崇りを鎮めたのが賀茂祭の始まりだと伝える『賀茂縁起』も実に興味深い。なぜ猪頭をかぶって馬を疾走させたのか。それが崇りを鎮めることになるという感覚と論理はいったい何であるのか。それがどのような「生態智」と言えるのかが掘り下げられねばならない。

ともあれ、最澄と空海は比叡山と高野山という森林の中に拠点を築き、高野明神像が黒犬を連れた獺師姿で描かれているように山民文化や山の金属技術者ネットワークに支えられていたことは間違いない。「森林」こそが「身心」を鍛え、練り上げてゆく格好の場所となった。そしてそのような比叡山と高野山の開創による「森林仏教」の発展が「草木国土悉皆成仏」とか「天台本覚思想」として結実していく。それは「自然」がそのまま仏であり神であり、自分自身の本姿であり、そのまま成仏していると観る感覚と思想である。このような感覚と思想は「森林仏教」の発展の中で深化し熟成していき、やがてそれが山王曼荼羅や熊野那智参詣曼荼羅などの、山や海を御神体と讃仰する日本独自の曼荼羅図像表現を生み出した。

図 平安京生態智研究の特色とキーワード



図 平安京生態智三大基盤の解明





バリ島、ガムランの演奏。ガムランとはマレー語の「ガムル」(たたく)が語源で、実に多くの「たたく」楽器で演奏される。その音階はおおむね、沖縄音楽に似た「ペログ」と、ヨナ抜き音階に似た「スレンドロ」に大別される(撮影: 小山敦資)

態智』として挙げた 水、祈り、芸術・技芸・ものづくり、里山のすべての要素が今なお有機的に連動していることを見て取ることができる。

バリ島も日本もアイルランドも共通して「島国」という地理的特性を持っている。島国とは四方を海に取り囲まれているということであり、この海山という自然条件・風土の中に人びとの生存や生活文化が育まれるということになる。アイルランドと日本との対照性を、かつて拙著『神と仏の精神史』の中で、「ユーラシア大陸の両耳」とメタフォリカルに表現したことがある。最終氷河期が終わった一万年前頃にユーラシア大陸の東西両端が切り離されて、それまで半島だった部分が島嶼(とうしょ)となってゆく。そして、大陸と微妙な関係を持ちながらも独自の島の文化を築き上げてゆく。そこに自然信仰ないしアニミズム的信仰に根ざした固有信仰が形成され、それぞれドゥルイド教や神道としてのまとまりを持ち始める。そこに大陸から文明宗教・普遍宗

教・世界宗教・大宗教としてのキリスト教や仏教が入ってくる。それが土着の信仰と結びつき、融合しながら、それぞれ異なった大宗教と小宗教(土着宗教)との関係の仕方を持った。また、そこにおいて、社会の統合軸(政治体制)と文化的連続性がどのように維持されてきたか、また植民地支配の有無とその影響はいかなるものであったのか、などなどの諸点から対極的に日本とバリ島とアイルランドの三つの島国を比較してみると、各地の風土に根ざした基層信仰に共通の要素を持ちながらも、独自の外来宗教との結びつきと関係性を築き上げたことが見えてくる。またその宗教が社会を束ねる政治的な中心点であった王権とどのような関係を保ったかによる違いも見逃せない。それらを大局的に外見しておく、表のような宗教と政体の特質を挙げる事ができるだろう。

とりわけ、バリ島と日本との共通点として、水、祈り、芸術・技芸・ものづくり、里山の四つの「生態智」要素を挙げることができる。バリの信仰の核心には水の神への信仰があり、それが高度かつ繊細に発達した水利組織と祭祀組織と結びついている。日本の場合、多くは水利組織と祭祀組織は同一集団であるが、バリの場合、両者が微妙にずれている。喩えて言えば、日本がユニゾンの響きを発しているのに対して、微細な差異を内包したユニ・ポリフォニックな響きを発しているという違いを持つ。ガムラン音楽のペア楽器が完全に同一のユニゾンの響きを発するようにできておらず、わずかなキーの違いを設けることで音のうねりを生み出すのにも似て、水利組合(スバック)は祭祀組織(プラスバック)と共振し半結合しながらも別の祭祀組織を含むことによって、対立と争いを避け、配慮と共鳴と調和を生み出す仕掛けを作っている。その絶

〔注〕(1)

建内光儀。上賀茂神社。には、『賀茂縁起』による欽明天皇の御代(五三九~五七一)に、國中に風吹き雨降り、天候が順で作物が実らず庶民が大いに愁い嘆いたので、朝廷から卜部伊吉若日子(うらべいきわかひこ)に命じてつわじめられたところ、賀茂大神の祟りであるとかわり、四月吉日を選んで馬に鈴をかけ、人は猪頭(いのがしら)をつけて走って祭祀を行った結果、五穀成熟して天下泰平になったと伝えられている。これが賀茂祭(葵祭)の起源ともいわれ(二二頁)と記されている。

(2)

大橋力。音と文明。岩波書店、二〇〇五年。河合徳枝・大橋力「バリ島の水系制御とまつり」『民族芸術』一七巻、民族芸術学会、二〇〇一年

(3)

大橋力氏は、『音と文明』の中で、「火山島の傾斜地を美しい棚田で埋め尽くし、精緻をきわめた灌漑手法で水を巡らせて水田農耕を営むバリ島社会にとつて最大の脅威は、我田引水が惹き起こす水争い以外の何物でもない。そこで利己の抑制を伴う水利システム総体の優位の確立が何よりも尊ばれることになる。この社会構造から発生する恒常的な葛藤圧を中和し、ストレスを低下させて『地上の楽園』を現出するメカニズムが、バリ島のあの『神々と祭り』にあることは次第に明らかになれつつある。日常性をはるかに脱したような強力な祭りの快感の導くエクスタシー、トランスそしてカタルシスという、癒しの仕組」があつて初めて、バリ島の農村共同体は磐石の結集を實現する。祭りの構築は、バリ島最大の生存戦略に他ならない(四六八頁)と指摘している。

(4)

大橋力氏はまた、「ハイパーソニック・エフェクトは、生理的には脳幹幹部の活性化を通じて私たちの脈を健やかな状態に導く」とともに、感覚性的には人を快感と美感に包む。この健康で快適な生存の霊薬ともいえるハイパーソニック・エフェクトは、熱帯雨林や伝統的祝祭空間の音環境の中ではたえまなく発生し続いているはずである。ノハイパーソニック・エフェクトを私たちが発見するに当たってその強烈な脳刺激効果によって決定的な役割を果たしたのは、バリ島のガムラン楽曲のひびきだつた(四六五、四六六頁)と述べている。

バリ島の美しい棚田風景。人と環境と神との調和を重んじるヒンドゥー教の教えによって、1000年の長きにわたる島の人々に守られてきた（撮影：小山敦資）。



妙な灌漑水利システムと水の神々のネットワークがバリ島全域に毛細血管のように張り巡らされていることによって、全体が生きた生態的生体として連動し合い、相互補充し合うことになる。つまり、祭りを運営する組織と水を分配する組織が同一ではなく交差して構成されることによって結果的に水争いが未然に防がれる仕掛けになっていることを、大橋力氏の著作『音と文明』や河合徳枝氏の「バリ島の水系制御とまつり」などの論考は指摘している<sup>③</sup>。

要するに、バリ島の祭祀や芸能を支える生態的基盤は水であり、その水の配分を巡る水利システムと水の神を含む神々への信仰と祭祀のシステムの相互関係性が最重要になる。

大橋力氏は、そのバリ島の「生存戦略」が「バリ島のコスモロジーを徹底する」個に対するエコシステムの優位」という価値観の存在を生み出したと洞察している<sup>④</sup>。今も維持されている京都の辻つじの地蔵祭祀や地蔵盆や祇園祭な

どの協働組織のあり方とバリ島の祭祀組織に共通する紛争解消の生態智の知恵を見て取ることができるとも思えない。バリ島の祭祀システムが、巧妙に仕組まれた水利システムを維持する各村々のコミュニティ組織に支えられ、維持されてきたというその生態・生業・祭祀・芸能の総合的連関は見事な有機的相互連関を保持している。そのシステムのディテールを持続千年首都・平安京の「生態智」や現在の京都の状況と比較することから何が見えてくるのだろうか。

バリ島の美しい棚田の光景と同様のものがかつての日本の各地でも見られたが、今はめっきり少なくなっている。琵琶湖の湖西地方に伝統的な棚田が現存しているが、日本の場合、水利と祭祀がほぼ同一化していることによって、対立を緩和する仕掛けが弱く、水争いが起こりやすい。だがバリ島では、小さな島でより争いを起こさないで共生していくことが最優先課題として設定されている。そして、その共生していくドライブとして、祭祀や芸能におけるフランス技術が発達した。ガムラン音楽とバリ舞踊におけるフランス誘発術とはドーパミンや エンドルフィン脳波派を引き出し、免疫活性を促し身心を賦活する力動を持っていることを前掲の大橋氏や河合氏は指摘している<sup>⑤</sup>。

今年、バリ島では新月となる三月一六日に新年の祭り「ニュピ」が行われた。その前に悪霊の祓いをしなければならぬのだが、村ごとにねぶたのようなオコオコという巨大な人形を作って飾り、寺院の御神体を海に運んで村中総出で清めるムラステイの儀式を行う。そして「ニュピ」の当日は村人たちは外出することも禁じられ、悪霊が去るのをただひたすら待つのである。その「ニュピ」の祭りの前日まで、つまり一年最後の日までバリに滞在しながら、わたしは遠く離れた京都の祇園祭のことを考えていた。

表

地域	宗教	政体
日本	自然信仰 神道+仏教	天皇制+将軍制(二重王制)
バリ	自然信仰 ヒンドゥー教	王制(連合)
アイルランド	自然信仰 ドルイド教+キリスト教	王制(連合)

【参考文献】

- 建内光儀 『上賀茂神社』 学生社、2003年
- 鎌田東二 『神と仏の精神史』 春秋社、2000年
- 大橋 力 『音と文明』 岩波書店、2005年
- 鎌田東二 『神と仏の出逢う国』 角川選書、角川学芸出版、2008年
- 鎌田東二編 『平安京のコスモロジー』 創元社、2010年

バリ島の「ムラステイ」のようす。ニュピの3日前に、寺院に祀られた御神体や聖なるものを清めるため、海岸で行われる儀式（撮影：小山敦資）。

